
突撃！ 底辺作家！

山口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突撃！ 底辺作家！

【Nコード】

N2810Z

【作者名】

山口

【あらすじ】

キング・オブ・底辺作家の俺が、人気作家を目指して今日も行く！

第一話・アクセス？ 何それ、おいしいの？

出た。

出た出た出た。

底辺作家が、出たー！

さあ皆、笑うがいい。

ネットの小説サイトに二百万字以上投稿して、感想を一件ももらえないこの俺を。

五年以上毎日欠かさず投稿して、評価ポイントを全然もらえないこの俺を！

ここで一発、長い長い自己紹介をしておこう。

名前は風宮翔、十六歳。以上。

さて、今日もネットの小説サイト「小説家のおたんちん」に投稿だ。略して「小ちん」。

この文字を見てヒワイな想像をしたアナタは、思春期によく見られる「エロティック・パンデミック病」に侵されている可能性が高い。至急、神経科を受診する様お勧めしておく。

でもって、この「小ちん」というサイト。結構な優れ物だったりする。

一番すごいのが、作品に対する読者のアクセス数を見られるっていう事だ。

ちなみに、俺の力作の昨日のアクセスはいくつかと言うとだね。

1だ。

おとといも1、その前も1。さらにその前も、その前も。

んぎゃあああああー！

そんでもって、累計ランキング1位の昨日のアクセス。
100万。

どしええええええー！

なんなんだ、これは。ゾウとアリンコくらいの差があるじゃないか。

俺が1位の奴に戦いを挑んだら、ぷちつと潰されて終わりだよ。
「ぷちつ」てね。

ぬおおお、ゆるせん。何がゆるせないのかわからないけどゆるせん！

こうしてはいられない。少しでもアクセスを増やしてこの差を縮めないと、屈辱のあまり憤死する。

そこで「アクセスアップの舞」を実行する事にした。

まず、神棚に祭った「アクセス大明神」に一礼する。ちなみにタヌキの置物だ。堂々としたタマタマが、器の大きさを感じさせる。

このタマタマという文字を見て「いやん、エッチ」と思ったところのアナタ。エロティック・パンデミック病に（ry

次にハゲカツラとサングラス、三本のうちわを用意する。「この組み合わせになんの意味があるのか」などと考えてはいけない。気にしたら負けだ。

カツラをかぶりサングラスをかけ、ズボンとパンツを半分だけ下ろす。全部下ろすと18禁の世界へ旅立ってしまうので要注意だ。

一本のうちわをお尻に挟み、残る二本を左右の手に持って力強くはばたく。

「ホーホケキヨ、ホーホケキヨー！」

どうだ、この勇姿とセクシーさ。これを見たアクセスの神も、ついアクセスを授けてしまうという物だろう。

そんな事をしていたら、壁から「ドカン」という音が聞こえた。隣の部屋のバカ姉が、うるささに怒って蹴っ飛ばしたに違いない。

名前は風宮恋花、十七歳。レンカと読む。美人だが、凶暴で食い意地が張っている。

こないだも、俺が冷蔵庫に入れておいた「むっちんプリン」を勝手に食べやがった。しかも全然悪びれる様子がない。人としてどうなんだとつくづく思う。

まあ、そんな事はどうでもいい。俺は小ちんからログアウトしてノートパソコンを閉じ、ベッドに横たわった。

そっぴゃ、携帯にメールが来てたな。返信しないと。

誰からなのか見てみると、クラスメートの一ノ宮優斗からだった。ユウトと読む。ちなみに、こいつも小ちんに投稿している。

メールの件名は「あーあ」。内容は以下の通り。

「昨日のアクセス、たったの3。またまた撃沈」

俺はすかさず返信した。

「バカ野郎、こっちなんか1だぞ。俺の3倍も稼いでるくせにへこんでんじゃねーよ！」

第二話・姉ちゃんが凶暴すぎた

まったく、どいつもこいつも腹が立つ。「アクセスが3しかない」
って、自慢にしか聞こえねーよ！

「ちくしょおお！　なんで毎日1しかないんだよおおおおー！」
一人だけでも読んでくれているのはありがたいけど、このお方に見
捨てられたら終わりじゃねーか！

「ふぎゃああああー！　んぎゃああああー！」

ひたすら騒いでいたその時、いきなり部屋のドアが開いた。おそ
るおそる見てみると、眉を吊り上げた姉ちゃんが立っている。

ライトブラウンのロングヘア、ぱっちりした目に二重まぶた、高
い鼻にすっきり整った輪郭。着ているのは赤いセーターとデニムパ
ンツ。

って、観察してる場合じゃねえ！

「何かご用ですか、お姉様？」

途端に、強烈なかかと落としが俺の顔にめり込んだ。

「ごぶうつ！」

「うるさいんだよ、バカ翔！　何回言えばわかるわけ？」

ひどい、鼻血が出てる。うおおーん！

「この暴力女！　人でなし！」

「アンタがうるさいのが悪いんでしょ！」

「だからって蹴る事ないだろ、貧乳！」

……あつ。しまった、口が滑った。

以下、非常に残酷な描写が続くのでカットいたします。

俺は腫れた顔を深々と下げ、床に土下座していた。

「すみませんでした……」

「本当に悪いと思ってる？」

「はい」

「二度とやらない？」

「はい」

「嘘ばかり。こないだもそう言ってたくせに！」

「はい」

とりあえず、適当に「はいはい」言っていればそのうち収まるだろう。あー、めんどくさ。

「反省してないでしょ！」

「はい」

「またやる気なんでしょ！」

「はい」

「『姉ちゃんのバカ、貧乳』って思ってるでしょ！」

「はい」

あ……あれっ。ヤバくね？

「こんの、バカ弟おおおおお！ 今すぐ死んでしまえー！」

ぎ、ぎゃああああああー！

姉ちゃんの攻撃、怒りの鉄拳！

「このっ！」

「あんっ」

「バカ翔！」

「やんっ」

「反省しなさい！」

「あはあんっ」

「気持ち悪い声を出すな、変態ー！」

まったく、怒りたいのはこっちの方だよ。

一生懸命書いてるのにアクセスは1だわ、姉ちゃんにボコられるわ。俺の人生はなんなんだ。誰か説明してみやがれ！

「うおおおん、ちくしょー！ こんな毎日、嫌だああー！」

小ちんで累計1位の奴がうらやましい。一日に何回も感想もらって、ごっそりポイントも獲得して。

正直な話、同じサイトに投稿してる人間とは思えない。アクセス

に百万倍の差があるって、どう考えてもおかしいだろ。

「うおおおおおん！」

号泣している俺を見て、姉が心配そうに顔をのぞき込んでくる。

「ご、ごめんね。やりすぎちゃったかな……」

「どーして俺はアクセスが1なんだああ！」

「なんだ、そつちか」

「そつちか、じゃねー！ 教えてくれえええ！」

ちなみに、姉も小ちんで連載してるそうだ。作者名は知らないけど、累計ランキングで上位にいるらしい。

こうなったら、このアホ女の意見を聞いてみよう。それで役に立たない様なら、さっさと追い出せばいい。俺って冴えてるー！

第三話・俺の小説って……

俺は小ちんで自分の小説を探し、恋花姉ちゃんに見せた。

「これだよ。知ってるよな？ 前に教えたし」

「ああ、うん」

「どこが悪いのか言ってくれよ、直すから」

「全部」

こ、こんちきしょー。読む前から言い切るんじゃない！

「全部ってなんだよ、読んでから言え！」

「んー」

くつつ、怒りで脳みそが沸騰しそうだ。今すぐ、このアホを叩き出したい。

「翔、アンタさあ」

「え？」

「マジメに書いてる？」

ぷっ、ぷぴー！

小ちんに投稿を始めてから五年、一度もふざけて書いた事なんかない。なのに、この女ときたら……人を侮辱するにもほどがある。

「マジメに書いとるわー！」

「どこが？」

「ど、どこがって……」

姉は深いため息をつき、俺を見ながら言う。

「タイトルは意味不明、あらずじは長いだけで要領を得ない、タグは人気ない物ばかり。本当に読ませる気があるとは思えないんだよね」

「じ、じゃあ中身は？」

彼女は小説に目を通した後、眉をひそめた。

「改行が全然ないし、難読漢字ばかりの上にルビもふってない。

一話は主人公の自己紹介だけで終わって、まったく動きがない。な

いない尽くしてブラウザバック余裕」

ぎ、ぎやああー！

「なんでアンタは、『わざわざ』なんて言葉をわざわざ漢字にするの？ もう少し読みやすい文章を心がけたら？」

ぐ、ぐえええー！

「しかも、主人公に全然魅力がないよね。ヒキでオタでデブで根暗、しかもブサイクって終わってるじゃないの。趣味がフィギュア集めとかさあ、女の子から見たら恋愛対象外だよ」

ふ、ふぐううう！

1ラウンドKO、試合終了！

俺は倒れ込み、カーペットの上を転げ回った。

「ふぎやああああ、俺の渾身の作品を全否定された！ もう生きていけない！」

「大げさだよ」

「死んでやる！ 死んでやるうう！」

「勝手に死ねば？」

本当に、鬼の様な姉だ。家族を思いやる気持ちはないのか？

「うう、人気作家が俺を見下す……」

「別に見下してないし」

「そうだ、姉ちゃんの作品ってどれなんだよ。実はたいした事ないんだろ？」

「トップページに載ってるよ」

……はい？

そこには、累計ランキング10位までしか載らないはずだけど。

「え、どこ？」

「ここ。一番上」

んぎやああああー！

こ、この女……トップランカーじゃねーか！

「ひいひい！ 嘘だ、なんかの間違いだ！」

「嘘じゃないもーん、本当だもーん」

「ぐおおおお！」

俺は七転八倒したあげく、その場に土下座した。

「姉ちゃん。いや、お姉様」

「なーに？」

「人気が出る方法を教えてください」

「おもしろい小説を書けばOK」

んな事わかってるわ、バカチンが！

「いや、あの……他の方法は？」

「え、他の？ 小説検索サイトに登録するとか、ツイッターでつぶやくとか……」

「両方やってるよ。他には？」

彼女は端正な顔に、悪魔の様な笑みを浮かべた。

「教えてあげてもいいよ。ただし、代償としてむっちゃんプリン三つね」

第四話・悪魔のささやき？

俺は急いでコンビニへダッシュし、むっちゃんプリンを三個買ってきて差し出した。

「どうぞ、お納めください」

恋花はぱっちりした目を細め、つやつやした唇を吊り上げる。

「うむ、よくやった。ほめてつかわす」

何様じゃ、この貧乳は！

……なんて事は、口が裂けても言えない。言ったら半殺しどころか全殺しにされてしまう。いや、そんな日本語ないけど。

俺は、揉み手をしながら言った。

「それで、あの……アクセスアップの方法は？」

「んー、待つて。先にプリン食べたい」

んなもん、後で食べるっつの！

「どうぞどうぞ、ごゆっくり」

「うふ、ありがと」

本心と真逆のセリフをさらっと吐ける辺り、我ながら役者だと思う。誰かスカウトしていいよ。

姉が満面に笑みを浮かべ、俺の椅子に座ってプリンを味わう。

「んー、おいしー！ 幸せー！」

「百円のプリンで幸せを感じるとか、安い女……」

「は？」

ヤ、ヤバい。つい口に出してもーた！

「い、いや。むっちゃんプリン、百円なら安いよね」

「んー、そうだね」

ふう、なんとかごまかせた様だ。さすがは俺。

「んでさあ、翔。アクセスアップの方法だけど……」

キ、キター！

「小・中・大とあるけど、どれがいい？」

なんだそれ、そんなにあるのか。

「ぜ、全部！」

「やん、欲張り」

「は、早く」

「うふふ。あ・わ・て・な・い・で」

そろそろキレてもいいでしょーか。

ああ、いけない。そんな事をしたら全てがおじやんだ。ここは、むっちんプリンのぷるぷるっぷりを見て落ち着こう。

ぷるぷる、ぷるぷる……ああ、あのとろける様なやわらかさ。むちむち、ぷりーん！

「翔」

「え？」

「目つきがやらしい」

「え、ええー！」

プリンに欲情した俺。人として終わってるじゃん！

「お、おお……人生終了」

「何をぶつぶつ言ってるの？」

「いや、あの」

「それでね、まず小だけど」

俺は身乗り出した。一言も漏らさずに聞いてやる。

「こまめに更新する事。理由は言わずもがな」

いや、毎日欠かさず更新してるんだけど……まあいいや。

「あとね、できる限り感想を書く事」

はあ？ それが、どうしてアクセスアップにつながるんだ？

「他の作者や読者に自分の存在を知ってもらえるからね。中には、感想を返してくれる律義な人もいるし」

なるほど。他人のためにしかならないと思ってたけど、そうでもないのか。

「じゃあ、中は？」

「前にも言っただけど、小説検索サイトに登録する事。『小説家にな

ろう 勝手にランキング』とか『アルファポリス』がおすすめ

「え、『小説家になろう』？」

「間違えた、『小説家のおたんちん』だった」

第五話・悪魔のささやき？

アルファポリスには登録してるけど、勝手にランキングには登録してない。すぐにやろう。

それに、感想もガンガン書いてやる。

「翔、一つ言い忘れたけどさ」

「何？」

「感想を書く時『私の小説も読んでください』だの『私の作品も評価してください』だの言うのは論外だよ」

そんな事、わかってるっつの。

「大丈夫。自分の小説の宣伝をする気なんかないし、感想をくれなんて書かないよ」

「うん。他人に感想を書けば自分のアクセスアップにつながると思うけど、それを目的にやっちゃダメ。あくまで『副産物』だからね」

へいへい、わかりましたランカー様。

「姉ちゃん、『大』の方法は？」

恋花は俺からパソコンのマウスを奪い取り、一人の作者を検索した。名前はガマグチだ。

「え、この人が何？」

「アンタと同じ、底辺作家」

他人から底辺とか言われるとなんかムカつく。事実だから反論できないけど。

「この人の作品、二つあるよね。その違いをよく見て」
「はあ……えーと。」

一つ目のタイトルは「毒薔薇の令嬢」。

ジャンルは文学。タグは薔薇、令嬢、残酷。投稿した文字数は約10万、獲得ポイントは2。

アクセスは一日あたり10人程度。俺ほどじゃないけど、人気が

ないのは確かだ。

「うーん、こりゃ悲惨だね」

「アンタに言われたくないと思うけど」

「う、うるせー。悪かったな！」

「気を取り直して、次いつてみよう。」

「タイトルは「異世界でハーレムを作りました」。

ジャンルはファンタジー。タグは異世界、チート、ハーレム。

文字数は約10万、獲得ポイントは1000……って、ええ？

「なんだ、この差は！」

「アクセスも見てみなよ」

「い、一日あたり1000人。なんだこれ？」

「口をばくばくさせていると、姉がにやにやしながら言った。」

「どう？ 同じ人間が書いた物とは思えないでしょ？」

「う、うん」

「どうしてもアクセスが増えないなら、こういう方法もあるわけ」

「え、こういうって？」

「恋花が目を細め、ピンク色の唇から甘い声を出す。」

「異世界、チート、ハーレム」

「なるほどね！」

「……って、ちょっと待ってくれ。」

「姉ちゃんの作品は、全然そんなタグないのに1位じゃんか！」

「うん。必要ないし」

「な……んだと……」

「く、くうつ。悔しくて鼻水が噴き出そうだ。」

「彼女が、俺の髪を撫でながら優しい声で言う。」

「あのね、翔。最後に一つ教えてあげる」

「何？」

「アクセスにこだわるのもいいけど、だからって己を見失っちゃダメ。自分が本当に書きたい物を書いた方がいいよ」

第六話・姉ちゃんと俺の差？

姉ちゃんの作品「光と風の黄金郷」^{エルドラド}には、異世界やチートのタグなどない。ハーレムや逆ハーレムもだ。

付いているのは「残酷な描写あり」「王女」「騎士」「恋愛」だけ。こんなシンプルな代物で、よくトップをひた走れるものだ。不思議でしょうがない。

ちなみに奴が敬愛している作家は、小野不由美と上橋奈穂子、田中芳樹だ。

俺は三人とも知らない。ただ、姉に絶大な影響を与えたという事だけは本人から聞いている。

「つか、姉ちゃん！」

「何？」

「あんただって、ろくに人気タグ付けてないじゃんか。それで読者を集める気があるのかよ！」

「あるよ」

「どこが？」

「どこって、私は内容で勝負してるから」

く、くうつ……タグの力に頼らなくても、充分に読者を集められるって事か。

ちくしょー、悔しすぎる。こいつの鼻の穴にコンセントを突っ込んで、携帯を充電してやりたい！

屈辱で肩を震わせていると、恋花は俺の頭をポンポンと叩きながら言った。

「まあ、このままじゃ誰も読んでくれないしね。客引きのつもりで異世界ファンタジー書いてみたら？」

「バカにすんな、誰がそんなくだらないもん書くかよ！」

途端に、姉の目が吊り上がった。氷点下の視線が俺を貫く。こ、怖い。

「アンタ、異世界ファンタジーをバカにしてるわけ？」

「してるよ。リアリティーのカケラもない、妄想の産物だろ？ 小
学生だって書けるよ、そんなもん！」

姉が大きなため息をつき、目を細めながら言う。

「アンタは長いこと小説書いてるくせに、何も知らないんだね」

「はあ？ 何言ってるんだよ」

「異世界ファンタジーって言うのは、ものすごく難しい分野なんだ
よ」

「え？」

自分の好き勝手にキャラを作れて、好き勝手にストーリーを作れ
る。魔法だろ？ が超能力だろ？ が、なんでもございだ。そのどこ
が難しいって？

恋花が、俺を見つめながら言う。

「例えばさ、日本を舞台にした小説を書くとするじゃない」

「うん」

「その中で『閑静な住宅街』と書いただけでも、読者は情景を想像
する事ができるよね」

まあ、ある程度は可能だな。

「でもね、異世界ファンタジーは違うんだよ。できないの」

「えっ！」

「だって、舞台になってる世界自体が違うんだから。日本と同じ様
な住宅が並んでるわけないでしょ？」

た、確かに。

沈黙していると、姉はさらに続けた。

「アメリカやロシアを舞台にして小説を書けって言われたら難しい
でしょ？ 異世界なんてなおさらだよ。国家から人種、度量衡に至
るまで全部作って、読者がわかる様に説明しなきゃいけないんだか
ら」

言われてみれば、その通りだ。作者の脳内にある架空の風景を読
者に伝えるのは、日本の風景を伝える事より遥かに難しい。

第七話・姉ちゃんと俺の差？

俺が沈黙していると、恋花はさらに言った。

「舞台が日本でキャラも日本人なら、説明が少なくてもある程度は通じるわけ。読者も大体が日本人だからね。でも異世界は違っんだよ」

「へえ」

「文化も風習も人種も違う世界を、ちよつと説明しただけで読者が理解できると思う？」

「まあ、確かに」

「それに、ファンタジーってジャンルは競争相手が多いの。適当な物を書くと、すぐ他の人とかぶってしまう。新人賞に応募する時は気をつけた方がいいよ。既視感まみれの作品を送ると、すぐにはねられるから」

なるほど、いろんな障害があるんだな。全然知らなかったよ。

「姉ちゃん。俺、偏見にとらわれてたみたいだ」

「そうだね。異世界を構築するには、確かな筆力があるんだよ。あまり馬鹿にしないでね」

「うん。とりあえず客寄せのつもりで、異世界ハーレム書いてみるよ」

姉の顔に笑みが浮かぶ。

「がんばって。異世界チートハーレムで毎日更新すれば、日刊ランキング100位以内には入るから。そうすれば、作者として多くの人に認知してもらえるよ」

「ああ」

恋花は、むっちゃんプリンを抱えて出ていった。あんな凶暴女でも、たまには役に立つもんだな。

そうだ、クラスメートの一ノ宮優斗にも教えてやろう。あいつも底辺作者だし、こういう情報はほしいはずだ。

俺は携帯を取り出し、彼に電話してみた。

「はい」

「優斗、大変だよ！」

「何が？」

「『小ちん』で人気作者になる方法を見つけちゃったんだ！」

「えっ」

しばらくの沈黙の後、彼の声が響いた。

「……実は、俺も見つけたんだ。たぶん、お前の方法とは違うけど」
「ええっ！」

「人気を集めるなんて、簡単な話だよ」
「なんだって？」

嘘だろ。一日のアクセスが1ケタの奴が言うセリフじゃねーぞ！

「お前、一体何を……」

「それは言えない。じゃーな」

ちよつと待て、どういう事だあつ！

あいつ、いつの間にそんな方法を。つか、なんで俺に教えてくれないんだ。友だちだと思ってたのに！

……まあいい、今に見てろ。一回でも日刊に載っちまえばこつちのもんだ。さあ、書くぞー！

とは言ったものの、急には思いつかない。俺はパソコンの前で固まってしまった。

「うーん、異世界ねえ……」

要するに、俺が住んでる世界と別の物を書けばいいんだろう。できるだけ他の作者とかぶらない様にした方がいい。

よし、ゲイバーを舞台にするか！

一度も行った事はないけど、俺が生活してる日常世界とは別物に違いない。よし、一つ目のタグは「ゲイバー」で決まりつと。

次、チート。って、なんなんだそれは。チーズの仲間か？

そう言えば、マジャン大好きな親戚のおじさんが叫んでたな。

「よっしゃ、リーチー発チートイツ！ 満貫！」

なるほど、チートっていうのはマージャンの役か。さすが俺、なんでも知ってるぜ！

最後にハーレム。まあ、これもすぐわかる。要するにモテモテになればいいんだろう。

さあ、方針は決まった。

主人公がゲイバーに行つてマージャンをして、見事にチートイツを決める。そこでゲイの人たちにモテモテになればオツケー。

タグは「ゲイバー」「チートイツ」「ゲイにモテモテ」。完璧すぎて涙が出る。

よし、さっそく書き上げて投稿しよう。これで俺の天下だあああああ！

第八話・壮絶な結果発表

俺は、さっそく新作を書き上げて投稿した。

タイトルは「モテモテおやじ」。今まで一度もモテた事がない五十代のおっさんが、ゲイバーで麻雀やってチートイツを決め（ry
さあ、見せてみる。異世界チートハーレムの底力、この俺に見せてみる！

「ふははは、ふわーははは！」

きつと、今日のアクセスは百万超えるだろう。超えるに決まった。さあ、後は結果待ちだ。居間でお菓子でも食べてこよう。俺の時代がキター！

翌日の朝。

今日は元旦だ。冬休みだし、さぞかしアクセスが集まっているに違いない。

俺は、わくわくしながらユーザページを開いた。きつと、山の様な感想が寄せられているはずだ。さあ、なんて返信するか考えないとね。

……って、あれっ。一つもなし？

まあ、第一話から感想の嵐って事もないよね。ちょっと甘すぎたな。反省反省。

それで、肝心のアクセスはと。

ふふふ、緊張の瞬間がやって参りました。どれだけ集まっているのか想像もできません。

「えいやー！」

アクセス解析をクリックした俺は、画面をじっと見つめた。さあ、どうだ！

……1。

1。いち。イチ……って、あれっ？

おかしいな。これ、解析機能がぶっ壊れてるだろ。もしくは、ゼロが六つ省略されてるとか。

いや、おかしいって。そんなわけないよ。目が疲れてるのかな。昨日のアクセス、1。今日のアクセスはゼロ。

こ……これは……もしかして惨敗？

「ウツキヤアアアアアッ！　ンキエエエエエー！」

思わず絶叫した。なんだってんだ。こんな結末があつてたまるかい！

「ヒエアアアッ！　キョキョキョキョキョー！」

頭に鉢巻きをつけ、前面に一本のうちわを挟んだ。さらに左右二本のうちわを握りしめ、部屋を飛び出す。

「ココココココココ、コケコッコー！」

必死に羽ばたきながら家のドアを蹴飛ばし、大通りへと踊り出た。銀行やらデパートやらが並んでおり、元旦の朝なのにたくさんの人が歩いている。

「クエツ、クエクエ、コケケケケッコー！」

叫びながら爆走すると、ジャージを着た女子中学生たちが歩いてきた。全員が一樣に目を見開き、きゃあきゃあと騒ぎだす。

「な、何あれ！」

「おかしいよ、あの人！」

「ちょ、やだ。逃げようよ！」

「キ、キチガイ……」

うるせー、お前らに俺の悲しみがわかるか。この苦しみがわかるかー！

「ウケケケケケケ、ンキヤキヤキヤキヤー！」

彼女たちの前で立ち止まり、その場で足踏みしながら激しく羽ばたく。

「クケエエエエ、ヒキエエエエー！」

中学生たちは腰を抜かしてしまい、その場に座り込んだ。それを横目で見ながら、さらに激しく舞い踊る。

「ウキヤキヤキヤキヤ、キヤアアアー！」

やがて、周囲に人だかりができた。スーツを着たおっさん、バッグを下げたおばさん、コートを着た男子高生、Ｔシャツ姿の小学生など様々だ。

俺は目をむいて彼らをにらみつけ、羽ばたきながら叫ぶ。

「見世物じゃねーんだよ！」

そうさ、俺はキチガイだ。でもわかってくれ。決して、わけもなく発狂したんじゃない。

「俺の小説を読みやがれー！」

絶叫していると、人ごみをかきわけて警官が現れた。ヤ、ヤバい！
「こら、君。何を騒いでるんだ」

「コケツ？」

「鶏の真似なんかい、何をしているのか答えなさい」

「パ、パ……」

「パ？」

「パフォーマンスです」

「通行の邪魔だからやめなさい」

警官に説教されてしおしおと帰宅すると、両目を吊り上げた恋花が腕を組んで待っていた。ひい、怖すぎる！

「翔」

「はい？」

「この……バカー！」

ぎゃあああ、バカにバカって言われた。悔しいー！

第九話・姉ちゃん噴火

恋花姉ちゃんは俺の手首をつかみ、自分の部屋へと引つ張っていった。

中は六畳の洋室だ。クローゼットに鏡台、勉強机に椅子、ベッドがある。

がさつなくせに、きっちり片付いているのが意外だ。てっきりゴミが散乱してるかと思ってた。

机の上にノートパソコンがあり、姉がその画面を指さしながら叫ぶ。

「これはなんなの、えっ？ なんのつもりなの！」

あ、俺の新作が映ってる。

「なんのつもりって、こういうつもりだよ」

「こういうつもりって、どういうつもり？」

「どういうつもりって、こういうつもりだよ」

「こういうつもりって、どういうつもり？」

「どういうつもりって、こういうつもりだよ」

「だから、こういうつもりって……あーもう、バカー！」

「ぶげっ！」

なぜか脳天にチョップを喰らった。俺が何をしたってんだ。

「いてーな、凶暴女！」

「うるさい！ バカだバカだと思ってたけど、これほどまでとは思わなかったよ。姉として恥ずかしいったらありやしない！」

「暴力振るう奴の方が、よっぽど恥ずかしいわ！」

「なんですって！」

恋花は散々俺を罵倒した後、両手で顔を押さえながらベッドに座り込んだ。

「あー、ひどすぎ……これが私の弟だなんて泣けてくるよ」

「勝手に泣いてればいいだろ」

「ふえええ、ふえええん！」

「うるせー！」

「何よ、勝手に泣けって言ったくせに！」

「はあ、何がどうしてこうなるんだ。俺は真剣に小説書いただけなのに。」

彼女が深いため息をついて言う。

「アンタさあ、マジメにやってよ」

「やってるよ、失礼だな」

「ゲイバーでチートイツ決めてゲイにモテモテって何？ それで人氣が出るとでも思ってるの？」

「むしろ、出ない理由がわからない」

「だ・か・ら！ アンタはゲイにモテて嬉しいわけ？ 美少女を出しなよ、美少女を！」

「そんなもん、書いた事ないなあ」

「じゃあ今すぐ書いて。私のパソコン使っていいから」

「ふん、俺の文才を見てひっくり返るなよ」

「いいから、さっさとやって！」

ああ、かん高い声でキンキンうるさい。そろそろ黙らせてやるか。

俺はさらさらっと書き上げ、満面に笑みを浮かべた。

「できた、完璧だよ。もう天才としか言いようがないね」

「わかったから読んでみて」

「よし、いくぞ」

俺はパソコンの画面を見つめ、自作の名文を高らかに読み上げた。

——マリアに初めて会った時、俺は目を疑った。これほどまでに可憐な女性が存在するとは、夢にも思わなかったからだ。

穏やかな光をたたえたつぶらな瞳、さらさらしたブラウンの毛。

頭に飾られたピンクのリボンが、そのかわいらしさを強調している。心を奪われ立ち尽くしていると、マリアは駆け寄ってきてこう言

った。

「ワンワン、キャンキャン！」

文章は以上だ。恐れ入ったか！

次の瞬間、俺は回し蹴りを喰らって椅子から転げ落ちた。

「いってーな、何すんだ！」

「おばか！ 誰がメス犬を書けなんて言ったの？ えっ？」

「犬の世界じゃ美少女なんだよ」

「最初から人間を書けー！」

本当に、この姉ときたら怒りっぽくって困る。きつとカルシウムが足りないに違いない。

「姉ちゃん、ほら。カルシウム剤だよ」

「いるかー！」

恋花はブチ切れた後、ベッドに倒れ込んだ。

「もうやだ、疲れた。こんなのマトモに相手してたら、私までバカになっちゃうよ」

「バカって言うな、天才に向かって」

「アンタ、何してもダメだわ。あきらめた方がいいよ」

「ちょ、ちよつと待てー！」

俺は、床に敷いたカーペットに両手をついて頭を下げた。もう、なりふり構ってられない。

「姉ちゃん。俺は、なんとしてでも底辺から脱出したいんだ。ヒントだけでいいからくれ！」

「だから、異世界チートハーレムで毎日更新すれば……」

「なんかそれ、難しい。他にないかな？」

「ない事もないけど……」

「お願いだ、教えてくれ！」

姉はベッドから降りて俺の肩をつかみ、瞳をのぞき込んだ。

「このアドバイスは、小説の質を上げるための物じゃない。あくま

でも、底辺から脱出するための手段だと考えなさい」

「はい」

「じゃあ、よく聞いて」

俺は、全身を耳にして恋花のアドバイスを聞いた。

第十話・姉ちゃんの秘策？

恋花姉ちゃんが俺の肩をつかみ、瞳をのぞき込みながら言う。

「方法は三つ。必ず全部実行してね。わかった？」

「う、うん」

うなずくと、姉は説明を始めた。

「まず、アンタの小説は三人称だよ。それを一人称に変えて。あと、視点は主人公に固定で」

え、三人称ってなんだろう。

「ごめん、言ってる意味がわからない」

「はあ？ 何がわからないの？」

「三人称」

「ええー！」

その直後、姉ちゃんのビンタが炸裂した。い、いてえええー！

「何すんだ、暴力女！」

「うるさい！ アンタ、何年小説書いてるの？ 人称も知らないとかさあ」

「そんなもん知らねーよ！」

「なんで逆ギレしてるわけ？ もう本当、信じられない！」

恋花は大きなため息をついた後、再び話し始めた。

「バカでもわかる様にざっくり説明するから、よく聞いてね。もっと詳しく知りたいなら自分で調べて」

「了解！」

「主語が『俺』とか『私』なのが一人称。『彼』とか『彼女』なのが三人称」

「オー、イエス……って、ちょっと待て！」

「なーに？」

「主語が『俺』の小説にだって、『彼はそう言った』みたいな文章はあるだろ？ その場合はどっち？」

「一人称小説」

「あつそ。で、どうして一人称の方がいいんだ？ あと、主人公の視点に固定する理由は？」

「感情移入させやすいから」

「なんで？」

姉が再びため息をつく。

「少しは自分で考えなよ」

「えーと、んーと」

「あのね。一人称小説で視点を主人公に固定すれば、語り手イコール主人公になるわけ」

「うん」

「読者の意識とシンクロしやすいと思わない？」

「いや、待て！」

「えっ」

「主人公がパンツ一丁で『ウホッ！ ウホッ！ 俺かっこいい！』とか言いながら通りを爆走する様な奴なら、シンクロできない！」

「そんな主人公に、最初からするなー！」

彼女がブチ切れたので、チョコクッキーを持ってきて与えた。こいつは、甘い物さえ差し出せばおとなしくなるからだ。

「ほら、クッキーだよ」

「わーい！」

ほら、おとなしくなった。俺って猛獣使いの才能あるよね。

姉はそれを食べ終えた後、また説明を始めた。

「結局ね。かたーい三人称の文をいきなり見せつけられると、中高生はブラウザバックしちゃうんだよ。文章は軽く、内容を重くね」

「わかった」

「で、二つ目だけど」

「うん」

「最初から、派手なアクションを起こして」
「なんで？」

「読者の興味を引くため」

興味を引く……ねえ。

沈黙していると、彼女はさらに言った。

「例えばさ。一話を読んだ時、包帯ぐるぐる巻きの主人公が病室のベッドでうなってるだけだったらどう思う？」

「どうって……死ぬほどつまらない」

「でしょ、じゃあ次。包帯ぐるぐる巻きで松葉杖ついた主人公が、燃え盛る病室の中で日本刀を持った男と戦ってたらどう思う？」

「戦いの結末を知りたくなる」

恋花が強くなさず。

「作者が第一にするべきなのは、読者の興味を引く事なの。どんな傑作だろうが、読んでもらえなきゃ終わりなんだから。わかる？」
なるほど。

凶暴度がさつで食い意地が張ってるだけかと思ってたけど、意外に賢いじゃないか。少し見直したよ。

「で、三つ目。これが一番大事だから、よく聞いて」

おお、聞いてやるさ。これで俺も人気作家だ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810z/>

突撃！ 底辺作家！

2012年1月9日22時53分発行